KURASHIKI
Japan Heritage

日本遺産

倉敷

綿花の紡いだ人と町、文化

一輪の綿花から始まる倉敷物語
～和と洋が織りなす繊維のまち～

※写真はイメージです。

日本遺産
倉敷市

倉敷市日本遺産推進協議会　平成２９年度「日本遺産魅力発信推進事業」

（事務局）倉敷市日本遺産推進室　〒710-8565　倉敷市西中新田 640　tel.086-426-3018　fax.086-426-5131

日本遺産倉敷　検索　www.city.kurashiki.okayama.jp/kura-story

（2018年3月）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

干拓によって生まれた町は、やがて大きな歴史を織り上げる。

倉敷川には観光客を乗せた川舟が行き交い、しなやかに揺れる柳の奥に広がる白壁商家群と洋風建築が調和する町並みには、四季を通じて多くの人々が訪れています。今から遡ること約四百年、倉敷市は、大小の島々が点在する穏やかな内海でした。その後、干拓によって一帯が陸続きに。干拓地での綿の栽培が始まると、その取引と人々の往来で町は大きく繁栄します。運河として利用され問屋や仲買人で賑わった倉敷川。北前船の寄港地として栄えた玉島や下津井の港町。それらの町並みは今もなお面影を残し、往時を偲ぶことができます。さらに綿花栽培から発展した繊維産業は、多彩な製品を生み出し、現代へと続く「日本一の繊維のまち」の礎となりました。先達の創意工夫によって時代と共に歩んできた、繊維のまち倉敷市。この長い歴史の中で紡がれてきた、人々の営みと想いの軌跡を紐解いてみましょう。

衣笠 豪谷「備中倉子城図」
明治 25 年（1892）

大正4年に刊行された「豪谷画荄遺墨集」にも掲載されている本作は、全長269.5cmの巻物で、倉敷の中心部から、ほぼ360度見渡した風景を描いた作品。

第 1 章

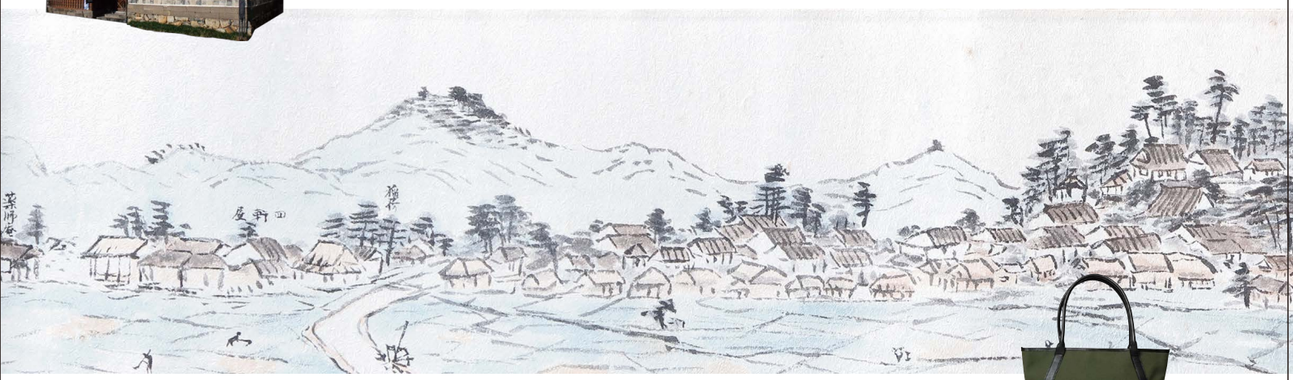
江戸時代初期～

～綿花を育む人、町、港～

第 2 章

江戸時代中期～

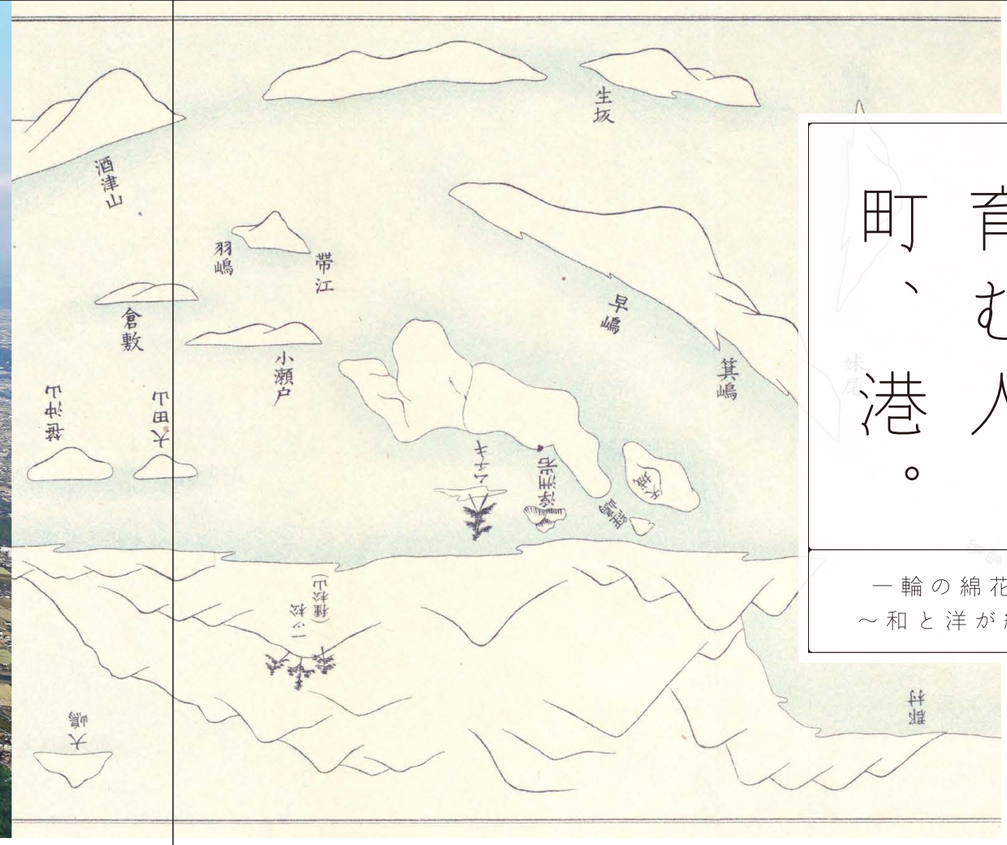
～繊維産業の発展と西洋との融合～



第 3 章

～現代

～日本から世界へ人と技術が拓く次世代の扉～



第1章

江戸時代初期〜

綿花を育む人、町、港。

一輪の綿花から始まる倉敷物語
〜和と洋が織りなす繊維のまち〜

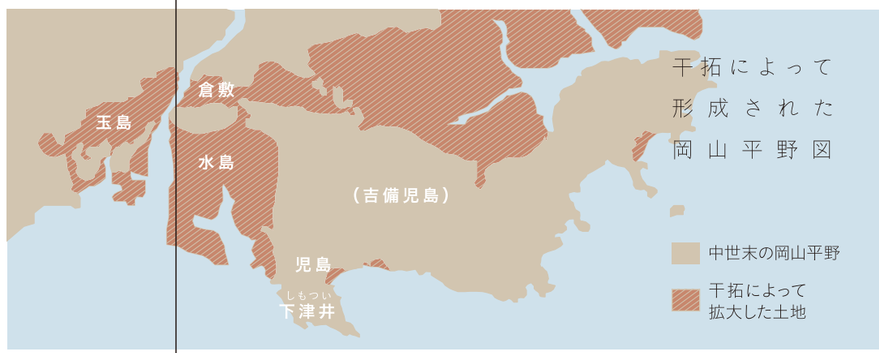
かつて海だった倉敷(右)と現在の様子(左)

約400年前までは内海が広がり、玉島・児島などの地名は島であったことに由来する。今は約48万人が暮らす都市として発展している。

綿花から始まる繊維のまち「倉敷」の物語。

倉敷市が位置する岡山県の南部一帯は、かつては「吉備の穴海(あなうみ)」と呼ばれ、島々が点在する見渡す限りの海でした。その海は高梁川(たかはしがわ)からの沖積作用で徐々に浅くなり、さらに近世以降の干拓によって陸地に姿を変えていきます。干拓されたばかりの土地は塩分が多く、米作りには向きません。そこで塩分に強い綿や イ草(くさ)の栽培が始まり、倉敷市の繊維産業の礎が築かれました。四百年続く物語の始まりは、干拓地で育てられた「一輪の綿花(めんか)」だったのです。

また、江戸時代初期に造られた水門などが、高梁川(たかはしがわ)から豊富な水の供給を可能とし、多くの人々の暮らしを支えることとなりました。



「塩田王(えんでんおう)」と呼ばれ福田新田を開発した野崎武左衛門(のざきぶざえもん)。

江戸後期、足袋(たび)業を営んでいた野崎武左衛門は塩田開発に目を向け、野崎浜(JR児島駅周辺)など約160haの塩田を拓きました。大規模な開発は武左衛門一代で成し遂げられ、「塩田王」の名を馳せました。また福田新田(しんでん)の開発にも携わり、嘉永(かえい)4年(1851)に完成させました。

旧野崎家住宅

野崎武左衛門の居宅。約3000坪の敷地に、母屋や庭が当時のまま保存されている。土蔵では塩業の歴史資料を見ることができる。
倉敷市児島味野1-11-19 tel.086-472-2001

01

02

03

01
高梁川(たかはしがわ)東西用水取配水(しゅはいすい)施設
高梁川改修工事に伴い建築された農業用水施設。大正期から残る鉄筋コンクリート造の樋門(ひもん)として価値が高い。
倉敷市酒津 tel.086-422-0219(高梁川東西用水組合)

02
一の口(いちのくち)水門
玉島港と高梁川を結ぶ水門で、高瀬舟の通行のため江戸初期に整備された。
倉敷市船穂町水江
tel.086-426-3851
(倉敷市教育委員会 文化財保護課)

03
板敷(いたじき)水門
江戸後期、福田新田の干拓の際に使用された排水用の水門。
倉敷市南畝4丁目、潮通3丁目
tel.086-426-3851
(倉敷市教育委員会 文化財保護課)

「綿」によって栄える「町」と「港」。

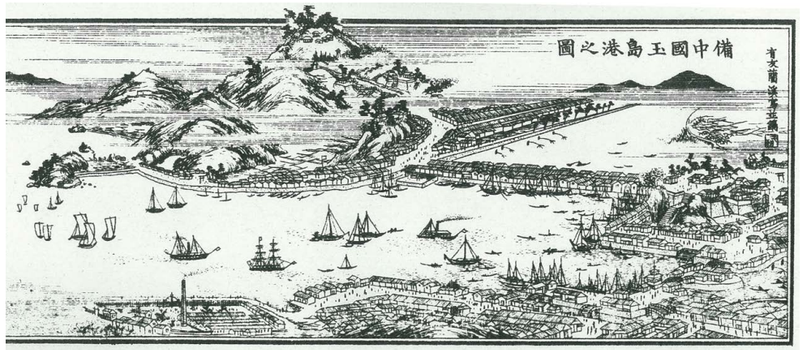
倉敷は寛永19年（1642）に幕府直轄地、いわゆる「天領」となって以降は、周辺の直轄領をまとめる政治の中心地であると同時に、備中南部の物資の中継地として発展しました。さらに江戸中期以降、干拓地で綿やイ草などの換金作物が盛んに生産されるようになります。その様子は江戸後期の紀行文にも「見渡す所の田地に、過半は綿を植えたり」と記されるなど、付近の干拓地一面に綿畑が広がっていたことが伺えます。当時の日本の物流を担っていた北前船の寄港地であった玉島や下津井の港町では、綿作の肥料となる大量の干鰯やニシン粕が買われ、くり綿や綿製品、塩などが出荷されました。玉島港の記録によると、売り買いされる商品の実に八割が綿関係で占められるほどであったといいます。また金比羅山との両参りで賑わいをみせていた由加山の門前町では、土産物として綿製品である真田紐や小倉織がもてはやされるなど、綿花栽培は地域発展の基盤となりました。この一帯で生産された綿は全国に流通し、倉敷に富をもたらす源となったのでした。

玉島町並み保存地区

江戸期の備中松山藩の干拓により、海から陸地となった港町。干拓地で栽培された備中綿を扱う問屋が立ち並び、「西の浪速」と呼ばれるほど繁栄した。当時を物語る虫籠窓や格子を備えた本瓦葺きの商家、なまこ壁の土蔵など、歴史的な景観が色濃く残っている。
倉敷市玉島阿賀崎〜玉島中央町

明治時代に描かれた「備中國玉島港之圖」

江戸期に全国各地への物資の輸送を行っていた北前船の寄港地であった玉島港。当時の様子を描いた絵図からも、軒を連ねる問屋や船が行き交う賑わいを伺うことができる。



旧柚木家住宅（西爽亭）

備中松山藩に仕えた玉島の庄屋・柚木家の住宅。港の商談や接待に使用された茶室も備えている。
倉敷市玉島3-8-25　tel.086-522-0151

讃岐金比羅山との「両参り」で賑わった「蓮台寺」「由加神社」。

江戸・明治の時代、金毘羅大権現（金刀比羅宮）のお参りは人々の憧れでした。そして、その人々は、本州から四国へ渡る旅の安全を祈願するため、日本三大権現の一つである瑜伽大権現（蓮台寺・由加神社）に参拝するようになります。次第に両社へのお参りが人気となり、「両参り」と呼ばれるようになりました。

門前町で土産として重宝された「真田紐」

蓮台寺

奈良時代に行基が開基したと伝えられ、江戸期には岡山藩主池田家の厚遇を受けていた。
倉敷市児島由加2855
tel.086-477-6222

由加神社

かつては瑜伽大権現を奉祀する社殿だったが、明治の神仏分離令により神社となった。
倉敷市児島由加2852
tel.086-477-3001

01

02

03

01
下津井町並み保存地区
北前船による綿花やニシン粕などが取引され、四国へ渡るための宿場町としても栄えた港町。
倉敷市下津井

02
むかし下津井回船問屋
回船問屋を改修した資料館で、商家の繁栄を今に伝えている。
倉敷市下津井1-7-23
tel.086-479-7890

03
下津井節
北前船の船頭衆によって広まり唄い継がれた民謡。唄い手の全国大会が毎年行われている。

倉敷川畔伝統的建造物群保存地区

倉敷川を中心に、格子窓の町屋やなまこ壁の土蔵などの建物と鶴形山の緑や川畔の柳並木が調和する景観が広がっている。

倉敷市本町・東町

第2章

江戸時代中期〜

繊維産業の発展と西洋との融合。

一輪の綿花から始まる倉敷物語
〜和と洋が織りなす繊維のまち〜

「白壁の町」から、繊維産業の町へと近代化を歩む。

運河として利用された倉敷川の周辺は綿などを扱う問屋や仲買人で賑わい、成功した商人たちは豪壮な屋敷を建ててその富を誇りました。現在も倉敷川沿いには、川港の繁栄を物語る当時の荷揚げ場や路地の石畳、常夜灯などが残り、興隆を象徴する白壁の商家の建物が軒を連ねています。その質実で無駄のないデザインは、重厚さの中にも明るさを備え、往時の商人たちの活躍を今に伝えています。明治時代になると、政府は殖産興業のもと、外国産の綿糸に対抗するために民間紡績業の育成を奨励しました。倉敷では国内最初の民間紡績所である下村紡績（倉敷市児島）が明治13年（1880）に、玉島紡績（倉敷市玉島）が明治14年（1881）に設立。さらに明治21年（1888）には、イギリス式の最新の機械と工場施設を備えた倉敷紡績所（現クラボウ）が倉敷代官所跡に設立されました。こうして、倉敷の発展の中心は日本の近代化に歩調を合わせて、綿花の商取引から綿製品を生産する繊維産業へと移り、さらなる飛躍へと繋がっていったのでした。

有力者たちの暮らしぶりを現代に伝える美しい歴史建造物

01

02

03

04

01
語らい座 大原本邸（旧大原家住宅）
江戸後期から商人・地主として村政を牽引し、明治以降も町の発展に貢献した大原家の邸宅。白壁に独特の意匠が美しい。
倉敷市中央1-2-1 tel.086-434-6277

02
大橋家住宅
江戸後期、新田開発などで財をなした大橋家の邸宅。倉敷を代表する町屋のひとつで重厚な屋敷構えからは当時の富が伺える。
倉敷市阿知3-21-31 tel.086-422-0007

03
井上家住宅
江戸初期から倉敷村の村政を担った井上家の邸宅。築約300年の倉敷最古の町屋で、防火用の土塗りなど、商家の原型を残している。
倉敷市本町1-40 tel.086-426-3851
（倉敷市教育委員会 文化財保護課）

04
楠戸家住宅
「はしまや」の屋号を持ち、明治2年の創業以来、現在も呉服店として営業が続いている。漆喰を塗り込めた「虫籠窓」が特徴的。
倉敷市東町1-20 tel.086-422-0117

倉敷の「ハレの日」を祝う。

江戸期以来の干拓地からの恵みを背景に、有力町衆の自治のもとで祭りや郷土料理などの豊かな文化が育まれ、現在も受け継がれています。

ばらずし
倉敷の商家では、祭りの日に隣人を自宅に招き、海や山の幸を盛り付けたばらずしを振舞った。

素隠居
年を取り、秋祭りに参加できなくなったご隠居が、面を作らせ代わりに参加させたことが起源とされる。

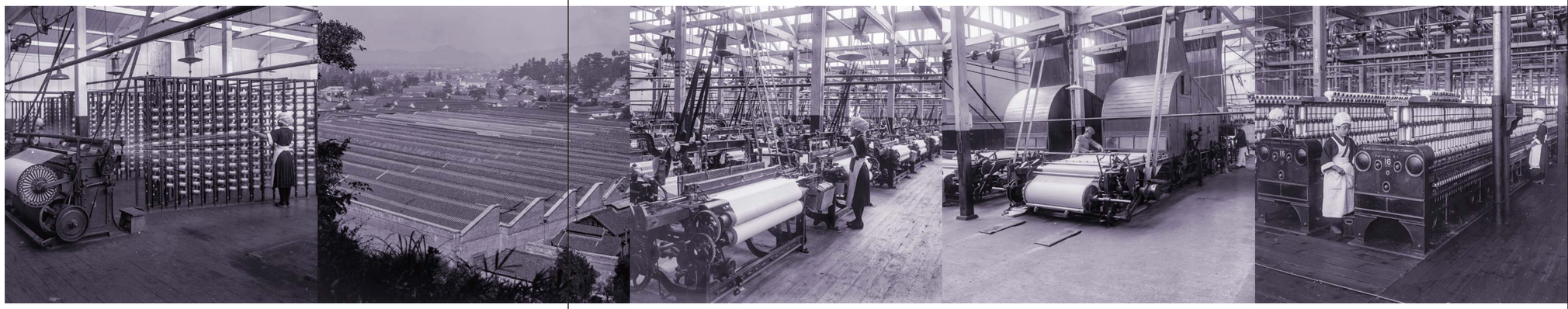
倉敷屏風祭
阿智神社の祭礼で、各家が通りに向けて屏風や花を生けて人々をもてなしたことから始まる。

産業と文化が華ひらき 和と洋が織りなす 町並みへ。

明治以降の近代化により紡績産業のまちとなった倉敷は、明治30年（1897）頃には約八十の紡績工場が立ち並ぶまでに発展しました。

こうした中、倉敷紡績所（現クラボウ）は国内有数の紡績会社へと成長。当時社長を務めた大原孫三郎は、若手画家の育成や西欧名画の収集、地域病院の設立、孤児院の支援など、当時としては先進的な文化・社会・福祉事業を展開しました。さらに民芸運動への支援や農業研究所の設立など幅広い分野にも着手し、現代につながる文化的な基礎を築きました。

また倉敷川沿いには、文明開化の伸びやかな感性により生み出された、ギリシャ神殿風の大原美術館などが建てられました。これらの洋風建築は白壁が連なる江戸期の商家群の中にあって、当時の紡績業の隆盛を伝えるシンボルとして風景のアクセントとなり、現在も町の魅力を一層際立たせています。



「天領　倉敷」復興のため創設された倉敷紡績所（現クラボウ）の工場の様子

明治維新の近代化に遅れ発展から取り残された倉敷を再興するため、大原家の出資により設立された倉敷紡績所。大原孫三郎の代には周りの紡績所を次々に合併するなど順調に拡大し、全国有数の紡績所となった。

01

大原美術館

倉敷の実業家、大原孫三郎が昭和5年に建てた、日本初の西洋近代美術館。エル・グレコの「受胎告知」をはじめ、世界の巨匠の作品が展示されている。

倉敷市中央1-1-15 tel.086-422-0005

02

倉敷館

紡績業が盛んであった大正6年に倉敷役場として建てられた洋風の建築。現在は観光案内所として利用されている。

倉敷市中央1-4-8

tel.086-422-0542（倉敷館観光案内所）

03

有隣荘

大原孫三郎が建てた大原家の旧別邸。和洋折衷の佇まいで、角度によって緑に見える瓦から、別名「緑御殿」とも。

倉敷市中央1-3-18

tel.086-422-0005（大原美術館）

04

旧中国銀行倉敷本町出張所

大原孫三郎が頭取を務めた第一合同銀行の倉敷支店。漆喰レリーフなど、ルネサンス風の様式をしている。

倉敷市本町3-1

大原孫三郎が支援した民芸文化

民芸品とは、人々の暮らしの中で使われる丈夫で美しい品々。倉敷には民芸文化が花開き、酒津焼、羽島焼、倉敷ガラス、緞通など数多くの民芸品が生まれました。

倉敷ガラス

酒津焼

羽島焼

緞通

倉敷ノッティング

イ草を芸術品に高めた磯崎眠亀と豪華絢爛な錦莞莚。

江戸時代の干拓以降、綿と並んでイ草も現在の倉敷市の庄・茶屋町地区を中心に栽培されていました。明治時代に入ると、小倉織を扱う商人、織元の家に生まれた磯崎眠亀が明治11年（1878）に高級花莚である錦莞莚（紋様織込）を発明します。海外に輸出も開始し、日本の重要輸出品目にまで成長しました。現在は生産されていませんが、岡山県のイ草製品が発展するきっかけとなりました。

磯崎眠亀記念館

磯崎眠亀の功績を記念し、住居兼作業場を改築した資料館。

倉敷市茶屋町195　tel.086-428-8515

錦莞莚

磯崎眠亀が発明した精巧緻密な紋様織込花莚。染色したイ草を緯糸に、綿糸を縦糸として模様を織り込んでいる。

第3章 ～現代

日本から世界へ 人と技術が拓く 次世代の扉。

一輪の綿花から始まる倉敷物語
～和と洋が織りなす繊維のまち～

倉敷アイビースクエア
明治期、旧代官所の跡地に創設された倉敷紡績所（現クラボウ）の工場を改装し、ホテルや記念館などに活用した複合交流施設。日本の近代化産業遺産に指定。
倉敷市本町7-2　tel.086-422-0011

時代と共に新たな魅力が生まれる繊維産業と文化の町。

戦後、大原孫三郎の長男で倉敷絹織（現クラレ）の社長であった大原總一郎により、昭和23年（1948）に江戸時代の米倉を改装した倉敷民藝館が開館。昭和49年（1974）には倉敷紡績所（現クラボウ）の工場を再生整備した倉敷アイビースクエアが開業するなど、古い建物を時代に合わせて活用し、倉敷の町並みは魅力を増していきました。現在でも町家や土蔵を改装したカフェやレストラン、手仕事による繊維雑貨を取り扱う店舗が軒を連ね、国内をはじめ、海外からも訪れる多くの観光客を魅了しています。

一方、江戸期以来の伝統産業に当時の先端技術を織り合わせながら発展を続けてきた倉敷の繊維産業。「織り」や「縫製」など連綿と続く技術の研鑽によって、足袋、学生服、作業着などの様々な製品が生み出されてきました。特に大正以降は服装の洋風化によって、学生服が急速に市場に浸透。紡績～撚糸～織物～染色～縫製という一貫した生産体制によって、昭和初期には全国の学生服の七割を児島産が占めるまでになりました。昭和40年（1965）にはそうした縫製の技術を活かし、国内初のジーンズを販売。児島は「国産ジーンズ発祥の地」と呼ばれるようになり、今日ではその加工も含めた生産技術は世界のジーンズ産業に大きな影響を与えています。こうして倉敷は繊維製品出荷額国内第一位（総務省平成28年経済センサス-活動調査による）を誇る「日本一の繊維のまち」となったのです。

「綿花」から展開された四百年にわたる物語。先達の技術と文化にかける想いを受け継ぎ、今日も新たな可能性に挑戦している人々によって、繊維のまち倉敷の次なる物語が始まっています。

倉敷民藝館
倉敷市の古民家再生第1号。江戸後期の米倉を改装し、館内には国内外約1500点の民芸品が展示されている。
倉敷市中央1-4-11　tel.086-422-1637

倉敷考古館
江戸期の米倉を改装し、吉備の考古資料を展示する博物館。東壁一面の「なまこ壁」が美しく、倉敷美観地区を象徴する建築のひとつ。
倉敷市中央1-3-13　tel.086-422-1542

倉紡記念館
倉敷紡績所（現クラボウ）の時代に原綿の倉庫として使用されていたレンガ造りの建物。創設80周年の節目に改装され、記念館となった。
倉敷市本町7-1　tel.086-422-0011

倉敷の多彩な繊維製品

丁寧な手しごとにより作り上げられた高品質な繊維製品が、現在も倉敷市で生産されています。

帆布

畳縁

イ草製品

作業着

時代を乗り越えた繊維産業

明治から大正にかけ生産を伸ばした「足袋」ですが、その後の洋装化で衰退します。しかし、培われた裁縫技術を生かし「学生服」の生産を開始。その学生服もメーカーの系列化で多くの事業者は、新しい道を余儀なくされました。すると今度は当時流行っていた「ジーンズ」に着目。瞬く間に人気商品となりました。先人の工夫の上で繊維製品は現在につながっているのです。

足袋

学生服

デニムジーンズ

児島ジーンズストリート
地元ジーンズメーカーのショップやカフェ・雑貨店などが連なるエリア。
倉敷市児島味野
tel.086-441-9127
（児島ジーンズストリート協同組合事務局）
tel.086-472-4450
（児島ジーンズストリート推進協議会事務局）

倉敷市の年表

	町の歴史		繊維産業の歴史	
江戸	寛永19年（1642）	備中松山藩主・水谷氏が本格的に玉島の干拓事業に着手	江戸中期～	干拓地に塩分が強い綿花（めんか）やイ草（ぐさ）が広く栽培される
	同年	倉敷が「天領」になる		
	江戸中期～	玉島港（しもつい）や下津井港で備中綿の出荷が盛んになり商港となる 北前船の船頭衆によって下津井節が酒の席で唄われる		
	寛文4年（1664）頃	一の口（いちのくち）水門完成		
	元禄5年（1692）	素隠居（すいんきょ）の由来ともいわれる「沢屋善兵衛というご隠居が年齢のために神社の秋祭りに参加できないので、自分の代わりに面を付けた者を代参させた」という逸話が残る	江戸後期	真田紐（さなだひも）、袴地（はかまじ）生産、小倉帯（こくらおびじ）地の生産が始まる
	享保6年（1721）	井上家（いのうえけ）住宅建築	江戸後期	瑜伽大権現（ゆが だいれんじ）（蓮台寺・由加神社（ゆが））が金比羅大権現（こんぴらだいごんげん）との両参りで賑わい、土産物として真田紐や小倉織（こくらおり）が人気となり織物業が発展
	天明年間（1781～1789）	旧柚木家（ゆのきけ）住宅（西爽亭（さいそうてい））建築		
	寛政7年（1795）	旧大原家住宅の主屋建築を着工		
	寛政8年（1796）	大橋家住宅建築		
	天保4年（1833）	旧野崎（のざきけ）家住宅の建築を着工		
	嘉永2年（1849）	板敷（いたじき）水門完成		
明治	明治2年（1869）	楠戸（くすどけ）家住宅が呉服店「はしまや」の屋号を持ち創業	明治11年（1878）	磯崎眠亀（いそざきみんき）が錦莞莚（きんかんえん）を発明する
			明治13年（1880）	下村紡績所設立
			明治14年（1881）	玉島紡績所設立
			明治21年（1888）	倉敷紡績所（現クラボウ）設立
			明治39年（1906）	足袋（たび）製造に児島に初めて動力ミシンが導入される
大正	大正6年（1917）	倉敷館（旧倉敷町役場）竣工（しゅんこう）	大正初期	帆布（はんぷ）の生産が始まる
	大正11年（1922）	旧中国銀行倉敷本町出張所竣工（しゅんこう）	大正7年（1918）	学生服の生産が始まる
	大正15年（1926）	高梁川（たかはしがわ）東西用水取配水施設（しゅはいすい）竣工（しゅんこう）	大正8年（1919）	足袋製造ピーク、約2,025万足を生産
			大正10年（1921）	光輝畳縁（こうきたたみべり）の生産が始まる
昭和	昭和3年（1928）	有隣荘（ゆうりんそう）建築	昭和38年（1963）	学生服生産が最多の約1,006万着を記録 この頃、事務服・作業服の生産も盛んになる
	昭和5年（1930）	大原美術館開館		
	昭和20年（1945）	第２次世界大戦 終戦		
	昭和23年（1948）	倉敷民藝（みんげい）館開館		
	昭和25年（1950）	倉敷考古館開館		
	昭和39年（1964）	東京オリンピック開催	昭和39年（1964）頃	光輝畳縁（こうきたたみべり）の生産が全国の8割に
	昭和42年（1967）	倉敷・児島・玉島の旧3市が合併	昭和40年（1965）	全国初の国産ジーンズの生産が始まる
	昭和44年（1969）	倉紡記念館開館		
	昭和46年（1971）	庄村が合併		
	昭和47年（1972）	茶屋町が合併		
	昭和49年（1974）	倉敷アイビースクエア開業		
	昭和54年（1979）	倉敷川周辺が国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定される		
	昭和61年（1986）	下津井（しもつい）の町並みが県の「町並み保存地区」に指定される		
	昭和63年（1988）	磯崎眠亀（いそざきみんき）記念館開館		
	同年	瀬戸大橋が開通		
平成	平成7年（1995）	むかし下津井回船問屋が開館	平成12年（2000）頃～	高品質なプレミアムジーンズが人気となる
	同年	玉島の町並みが県の「町並み保存地区」に指定される		
	平成17年（2005）	船穂町・真備町が合併	平成30年（2018）	学生服誕生100周年を迎える
	平成29年（2017）	「一輪の綿花から始まる倉敷物語」日本遺産認定		

町衆文化
・倉敷屏風祭（びょうぶまつり）
・素隠居（すいんきょ）
・ばらずし など

民芸文化
・倉敷ガラス
・酒津焼（さかつやき）・羽島焼（はしまやき）
・緞通（だんつう） など